猫達の遊戯

カドタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫達の遊戯

【Ｎコード】
Ｎ７０５３Ｄ

【作者名】
カドタク

【あらすじ】
猫達の遊戯が始まる……神を糧にして、人を生贄にして、己を犠牲にして……猫達は遊戯を始める。―――それぞれの思いを秘めながら―――

一冊目：始まりの発端（前書き）

初めましてカドタクです。
今回初投稿など素人ですが読んでくださると嬉しいです。
ちょっとした注意事項というか作者の身勝手なんですが、今回の作品‘猫達の遊戯’は本編ではありません！！（マテ
次回作品‘猫乙女らの遊戯’に繋がります。どう繋がるかは今はまだ秘密とゆうことでｗ

でわでわ、ゆっくりと読んでくださいまし。

一冊目：始まりの発端

遙か昔、一人の神様とたくさんの猫達が住む土地がありました。
その土地は1年中春の様に暖かく山と海、そして大きな森で覆われていました。
神様と猫達が楽しく過ごしていたある日、海から大きな箱に乗った生き物がやって来ました。
それは人と言う生き物でした。神様は快く人を受け入れ、猫達は新たな仲間に宴をひらきました。
人は神を讃え、祀りました。
数日が過ぎ人は神様に頼みあるものを作り始めました。それは家というものでした。
人は次々と家を建てていきました。
人が家を建てる度に猫達は困りはてました。家を造る度に木々は伐られ山は削られていまい猫達の棲みかがなくなってきたのです。
猫達は神様に言いました。
「これ以上好き勝手に家を建てられたら私達の棲みかがなくなってしまいます。このままだと人は自然を食らいつくしてしまいます、そうなれば私達は暮らしていけません。どうか一刻も早く止めさせてください」
猫達は訴えかけました。
しかし神様は猫達の言葉に耳をかたむけませんでした。神様は物を作りなにより讃えてくれる人を気に入っていたのです。
やがて猫達の棲みかは最初の半分以下になってしまいました。

猫達は密かに集まり会議を始めました。
　はじめに桃白い猫が言いました「私達がこの土地を離れ新たな棲みかを探した方がいいんじゃない？」

双子の猫が言いました「私達の足では遠い場所にはいけませんよ」
「この土地で何を成せるか考えるべきです」
茶色の猫が言います「神様は今や人にしか興味を持てれていない。ならまず神様の気をこちらにむけては如何です？」
狐色の猫が言いました「私達に見向きもしなくなってるからそれは出来ないと思う」
年上の猫は言いました「人と分かり合うことは出来ないのかな？」
紫の瞳の猫が言いました「無理無理、そんなの。今までがそうだったろ？なんならいっそのこと神様ごと殺っちゃおうよ」
急な発言にほとんどの猫達は驚きうろたえました。愛する神様を傷つけるましてや殺そうなどと考えられない。そして、さらなる発言に誰もが自分の耳を疑いました。
それはリーダーを担う白猫の発言でした。
白猫はこう言いました「そうだね、私達が神様のかわりになればいい。しかし、私達はただの猫だ神様の様な力はない神様のかわりになるにはあ余りにも非力だよ」白猫は首をふり猫達を見ました。
すると桃白い猫は笑みを浮かべ言いました「なら神様を食べてしまえばいい、カミサマを食べて自分達の血肉にしてしまえばいい」クスクスと笑いながら白猫を見つめ返しました。
皆の動揺とざわめき、しかし人とそして神様と分かり合えない以上自分たちが生きるためには既にそれ以外の方法が見当たらなかったのです。
≪神様を殺すしかないのか≫誰もが困惑している中、白猫は決断をし言いました。
「その方法しかないのなら、その役割は私が担おう。罪の業を背負うのは私だけでいい、皆がわざわざ辛い思いをする必要はないよ……今からすることは私の独断…皆は何も知らないし聞かなかった事にするといい」
すると今まで目をつむりヨコになっていた黒猫が言いました
「だったら兄様の力をかりようか？」

黒猫の言葉に誰もが息を呑みました。黒猫の兄とは大きくそして凶暴な鋭い牙をもつ黒い犬なのです。
更に黒猫は言いました。
「私達だけでは神様を殺す事は出来ませんよ？なにより神様の恩恵を承けている私達では神様を傷つけさえ出来ないかも知れない」
黒猫は言い終わると目を閉じ寝そべりました。
そして会議をした結果、九匹の猫と犬が神様を殺す役割を担うことになりました。
最後に桃白い猫が言いました。
「最後に宴を開こう私達九匹は出れないけど神様と猫だけの最後の宴を」
桃白い猫は無表情で淡々と言いました。

――そして猫達と神様の最後の宴が開かれたのです――

二冊目：宴の終わり

翌日、神様と猫達だけの宴会が開かれました。愛しい神様との最後の宴会はそれはそれは豪華で楽しい宴会を開きました。楽しい宴会の中、神様は気がつきませんでした。

――――そこに九匹の猫がいないことに……

宴会が終わり神様は聖地に帰ろうとすると目の前に三匹の猫が待っていたかの様に座っていました。
神様は三匹にどうしたのか問いかけました。しかし三匹の猫から返事はかえってきません、すると右から二匹左から二匹と猫がやって来ました。振り返って見るとそこには二匹の猫と一匹の黒き犬がこちらへやって来ました。
ただならぬ雰囲気に神様は戸惑いました。
すると一歩前に出た白猫が言いました。

「神様なぜ私達を見捨てたのですか？」

突然の問いに神様は白猫の言葉の意味が解りませんでした。
白猫はもう一度言いました「神様なぜ私達を見捨てたのですか？」
神様は言いました「私は君たちを見捨てたりしないよ、それに先ほどまで楽しく宴会をしたじゃないか？」
神様はやはり猫達の言うことが解りませんでした。
すると桃白い猫が言いました「貴方は人の言葉だけに耳を傾け私達の言葉には全然耳を傾けさえしなかったね」
そして白猫が言いました「人の創造を許しその行為をずっと許していた、そのせいで木々は伐られ山は削られ私達の棲みかが無くなっていった……貴方は私達の仲間がどれほど死んだか知ってますか？」

神様はようやく気づきました。
自分が猫達に何をしていたのか自分の罪に……
最後に桃白い猫が言いました。

「これは貴方の結末です」

その瞬間、神様の喉を黒き犬が食付き噛み千切りました。
そして猫達もカミサマを咀嚼し始めました。始めに白猫が頭を喰い、次に茶色の猫が足を喰い、次に双子の姉猫が耳を喰い、双子の妹猫が鼻を喰い，次に歳上の猫が目を喰い、次に紫の瞳の猫が腕を喰い、次にに狐色の猫が心臓を喰いました。そして黒猫が後始末をし猫達はカミサマを喰い尽くして一時解散しました。

そして最後まで残った桃白い猫は皆が居なくなったあと虚空を見つめ言いました。
「皆美味しそうに貴方を食べてたよ。だから私は最後に残った貴方を喰うことにするよ」
そして、桃白い猫は虚空に向かって喰いつき飲み込むとポツリとつぶやきました。
「これからが楽しい遊戯の始まり……ふふふ、アハハハハ」

———満月が満ちる夜　、一つの魂が失われ一つの笑い声が響き渡った———

三冊目：朝と黒の出会い（前書き）

長らく御待たせしました。やっとこさ3話目です^^；
待っていた方もそうでない方も楽しく読んでいただけたら嬉しいです（^^）

三冊目：朝と黒の出会い

神様を喰らった猫達の異変は明らかだった・・・
何故なら、九匹の猫達は異形の姿になっていた・・・
しかし神様の力を持ったのもたしかだった・・・・・・

神様が喰われてから一週間がたった。
姿を見せなくなった神様に人々は困惑の色を見せ始めた。
人々の頭首である≪神楽坂≫とその側近たる≪神名、如月、十六夜、雪乃嬢、鎖音、黒猫、浅偽≫そして≪神名≫に御使いする≪犬神≫が集まり神様の捜索を開始することとなった。
また、猫達も行動を起こすため準備をしていたのだった・・・

猫達は準備をしていた。犠牲になった9匹の仲間のもとで自分達の棲みかを取り戻すべく・・・
そう、人の言葉を借りると『れこんきすた』というらしい。
猫達は着々と準備をしっていった。人をこの土地から無くすために・・・
そして、その様子を遠くから覗いている一匹の≪黒き犬≫がいた。

日が既に沈みかけていた頃、≪犬神朝徒≫は一人捜索を行っていた。
ふと背中から引き寄せられる感覚を感じた朝徒は振り返ると黒き森から鋭き牙を持つ一匹の黒き犬がこちらを見つめていた。
朝徒は不気味さを感じ黒き犬から離れようとしたとき何処からか『声』が聞こえた。

「人よ、生き延びたいのなら私の話を聞け」
その声は黒き犬から発せられたものだった。
朝徒は驚きと恐怖が混じり合い混乱し黒き犬から目が放せなくなっていた・・・
黒き犬は朝徒の様子など気にもせず喋りつづけた。
「人よいくら探しても神はみつかりはしないぞ・・・神は殺されたのだからな」
朝徒は黒き犬の言葉をすぐに理解できなかった。
（神様がなんだって？・・・・殺された？）
黒き犬は淡々と事実を喋りつづける。
「９匹の猫によって神は殺されそして・・・喰われた」
黒き犬は朝徒に驚愕の事実を言いつづける。
「そして神を喰らい神の力を手に入れた猫達は人に復讐しようと棲みかを取り戻そうと準備をしている」
朝徒はなんとか冷静を取り戻しつつ黒き犬に訪ねた。
「君はなんなんだ？もしその話が本当なら何故僕におしえる」
黒き犬は朝徒を見つめ言った。
「神を力を得た猫の中に人に復讐する事を快く思ってない奴がいる……私はそいつに少しばかり協力しただけだ」
「本当の話なのか？」
「信じる信じないは貴様たち人の自由だ。もし生き残りたいと思うのなら明日この黒き森に来い」
そう告げると黒き犬は朝徒に背を向け黒き森の方へ歩き出した。
「まって君はいったいなんなんだ」
朝徒の声に黒き犬は振り返りただ一言『咎狗だ』と言い黒き森の中へと消えていった。
朝徒はただ森の中へと去ってゆく黒き犬を茫然と見ていることしかできなかった。

――――この出会いから朝徒は非日常へと足を進めて行くことになるとは今の朝徒は微塵も思ってはいなかった――――

四冊目：幽（前書き）

三話の次回予告と異なってしまったので修正しました（^^;）
四話目の始まりです、でわでわ御ゆるりとお楽しみください^^

四冊目：幽

翌朝、犬神朝徒は昨日の出来事の事で悩んでいた。
黒き犬……『咎狗』と答えたあの犬の言葉の真偽を確かめるか否か……
嘘だとは思ってないがこのままあの犬に関わると良くない事が起きそうな……そんな予感がするのだ。

「あの犬にもう一度会うべきか……あの犬が何かを知っているのは確かなんですが……だが…」
「どうかしましたか？朝徒」
「えっあっ！ゆ、幽様いつの間に居らしたんですか！？」

いつの間にか朝徒の背後に小柄な女性が立っていた。

「会うべきかとつぶやいてた辺りですかね？犬がどうとか……誰かから仔犬でも貰うのですか？」
「あぁ、いえ会うことは会うのですが別に仔犬を貰う訳ではないです」
幽は首を項垂れてつぶやいた。
「そうなんですか……少し残念です」
「ですので幽様、昼辺りお暇をいただきたいのですが……良いでしょうか？」
幽は首を項垂れながらポツリと答えた。

「駄目です」
「えっ？」

幽は顔をあげると怒った顔で朝徒を見上げた。

「朝徒！二人っきりの時は呼び捨てで呼び合うと約束しましたよね！なのに幽様、幽様って！二人っきりじゃなくても幽と呼んで欲しいのにそんなに私の事が嫌いなんですか！！嫌いなんですね！！うぅっ、私泣いちゃいます」
幽は憤怒しながら言い終わるとメソメソと泣き始めた。
「いや、でも幽様は『神名』の者ですから呼び捨てはさすがに……」
「そんなモノ関係無いですぅ、やっぱり私の事などどうでもいいんですね。うぇ～ん」
幽は完全に泣き出した、朝徒は泣かれたままだと色々と面倒なので折れる以外の道はなく。
「あぁもう、わかりました。わかりましたからもう泣かないでください」
「ぐずっ、ホントですか？」
「えぇ、私が悪かったです。すみません」
「なら、今呼んでください」
幽は朝徒を涙目でじっと見つけた。
「わかりました。だから泣き止んでください、幽」
「うん、朝徒。えへへ」
幽は涙を拭って満面の笑顔で笑った。
（あぁ、やはり幽は笑顔が一番良いですね）
朝徒はそんな事を思いながら会う決心を心に決めていた。
「それでは私は行って来ますので、帰りは何時になるかわからないので遅くなると当主に言って頂けますか？」
「うん、任せて。朝徒行ってらっしゃい」
「えぇ、それでは行って来ます。幽」
朝徒は幽に見送られながら黒き犬が居る森に向かって行った。

――そして、運命の歯車は加速する。その先にあるのはなんなのか……今は誰も知るよしもない――

四冊目：幽（後書き）

こんなに早く４話を更新できたのは奇跡なのか＼（゜ロ＼）（／ロ゜）／

と、冗談はさて置き

読者の皆様のためがんばちゃいましたw

次話も早く更新できるかなぁ～（；一＿一）

五冊目：森の中の密会１（前書き）

急に寒くなりガタガタ震えながらもチョコチョコかいてます（ーωー；）

感想、評価など気軽にください（＾ｖ＾）

まってま～すゝ（，∀、）ノ

五冊目：森の中の密会1

朝徒が出かけてから一時間が過ぎようとしていた。太陽は頭上から悠々と見下ろしているが森の中は意外にも涼しかった。
森の小さな滝に影が3つ……
それは、朝徒と黒き犬そして女性の影だった。

「まだ完全に昨日の話しを信じた訳じゃない。その真偽を確かめるために来た」
朝徒は開口一番にそう告げた。
すると見知らぬ女性が答えた。
「遅かれ早かれ猫達は動き出すでしょう。事が起これば進行するのは早い……もしかするともうすでに急速に進み始めてるかもしれません」
事が起これば急速に進む、ましてや既に進み始めてる……
女性の言葉に朝徒は背中に冷たいモノ感じた。

「納得できる真実を教えて欲しい。神様は確かに死んだのかもしれない……けど私には信用出来る要素が何一つない」
朝徒は黒き犬を睨む様に見つめた。
「信用たる要素か……神を喰った猫と会わせたら信用するか？」
「神様を喰らった猫か…あぁ、わかった。私もこの場所に来た以上覚悟は出来ている……だからそちらが知っている事全てを教えて欲しい」
「全てを話そう、まずは今の状況を何処まで理解しているか聞きたい」
朝徒は考えて今知ってる事を答えた。

「私達は神様が亡くなったことを知らないから今だ神様を捜している所だが神様は既に猫達によって殺されていた。そして神様の力を手に入れた猫達が人に復讐しようと準備をしている……私が知っているのはここまでだよ」
黒き犬は頷き今の状況を話し始めた。
「猫達はこの土地から人を消そうとしてる。この土地から人と言うモノを消す……その意味が解るか？殺すのではなく消すんだ。つまり人と言う存在を消して二度と人と言うモノが生まれないようにする。それが猫達が準備していることだ。」
殺すのではなく消す……その意味に朝徒は見知れぬ恐怖を抱いた。
「でも…どうやって猫が人を消す？」
「何も創り出すだけが神の力ではない消すのもまた力の一つだ」
「神様の力で消そうとしてるのか！」
「そうだ。何処まで進んでいるのかは解らないが猫達は今も着々と準備を進めているのはたしかだ」

（この話しが本当なら……いや、しかし）

「本当に…何処まで進んでいるのか解らないのか？」
朝徒は黒き犬に問い返すと黒き犬は考える様に少し間を置いてから答えた。
「何処まで進んでいるか知って奴は居る……だが今すぐには会わせる事が出来ない。夜にもう一度ここに来い…後の話しはそれからだ」
黒き犬は「夜の準備をしておく」と言い森の奥えと歩き出した。
黒き犬が見えなくなると共に居た女性が話しだした。
「クロも行ってしまったようだし自己紹介でもしましょっか。クロたらいきなり本題に入るから私の事言えなかったしね」
女性はそう言うと朝徒に座る様うながした。
「夜まで時間は長いわ。貴方に色々教えてあげるこれから生きてい

くための術をね」

――夜までの時間、彼女の話は朝徒にどんな影響をもたらすのだろうか――

六冊目：魔鬼（前書き）

長らく御待たせしました（^^；）
六冊目のこうしんです。

六冊目：魔鬼

サアアアアアアア
森の中の小さな滝が音を支配していた。小動物の声も気配もなく小さな滝が音を放っている。
生命が感じられないほどの静寂……
否、そこには二つの大きな影があった。
一人は哀しげな瞳でただ見つめ、もう一人は大きく目を見開きただ呆然と立ち尽くしていた。
その時の呆然と立ち尽くしていた者の眼は血の様な赤い瞳をしていた。

――――3時間前――――

「貴方に色々教えてあげるこれから生きていくための術をね」
彼女は朝徒にそう告げた。これから生きていくための術……
彼女が言ったことは≪自分は遅かれ早かれ危険な目に合う≫そう告げたようなものだ。
もう戻れない……朝徒は確信した。なら、自分がすることは自分が出来ることは決まっているようなものも同然だ。

「教えてください……私にその生き抜くための方法を」

朝徒の答えに彼女は深くうなずいた。
そして朝徒は彼女から色々な事を聞いた。そしてこれからの事も……

「まず…そうね自己紹介からしましょうか。あぁでも貴方のことは知ってるから私だけ紹介するね。私の名前は神封寺魔鬼(シンフウジマキ)名前どおり私は神を封ずるもしくは殺消する鬼よ」
「お、に？」
「そう神格をもったね。私が此処にいる理由は神を喰らった猫達を始末することよ」
彼女は冷たい眼差しでそう答えた。
「それは猫達を……殺すって意味ですか？」
「そうなるかも知れないしそうならないかも知れない。それは貴方しだいだから」
「私しだい…ですか」
「ええ、初めにも言ったように貴方が中心になるからよ。だから未来を決めるのは貴方しだい」
しばらくの沈黙の間彼女は再び話し始めた。

「この先もしかすると数十年数、百年後にきっと人と猫の争いになるわ。どのような争いかはわからないけど……けど今は貴方のことね」
彼女は苦笑しつつどこか寂しげな表情で話し続けた。
「次に話すのはこれからの事、まず確実に猫達は人に襲いかかるわ。その時かあるいはその忠告の時にきっと姿を見せるはずよ。その時になんとか面合わせをしといた方がいいわ・・・その後どうなるかは貴方しだいよ」
「私は何をしたらいいんだ」
「今は話を聞きなさい。猫達がどうなるかは私にもわからないわけど問題はこの後なの」
「後？」
「そう、その後。貴方の体をクロはきっと奪うはずよ」
「えっ、奪う？体を？」
「ええ、貴方を事の中柱とするために貴方の中にクロを宿すのよ。

そうしないと神を喰らった猫達に対抗できないから……ごめんなさい」
「……なぜ、魔鬼さんが謝るんです？これは私が望んで選んだ道です。魔鬼さんが謝ることではありません」
「けれど私には止められないの……貴方を犠牲にしている……だから責めて貴方だけでも生き残らせてあげたいから……」

彼女はいや彼女こそ犠牲者だ。この争いは人と猫の問題だから……朝徒は心の中でそう思った。だからこそ朝徒は決意した。関係のない彼女がここまでして人と猫の争いを止めようとしている、だから私も人として出来るもの全てに全力を尽くそう。
朝徒は固く決意した。

「それで私は今から何をすればいい？」
魔鬼は真剣な顔でゆっくりと答えた。
「私の血を飲みなさい。貴方に鬼の力を宿します」
「鬼の力？それを宿すとどうなるんだ？」
「私の血を飲む事で貴方は神をも凌ぐ鬼になります。つまり、私と同じ存在になるの」
「それが生きる術？」
「そう、神の力を得た猫から…そしてクロから対抗するための力。ただ……」
魔鬼は曇った表情をして答えた。
「もし私の血を飲んだとしても鬼の力を受け入れられるかどうかはわからないの」
「受け入れられなかったらどうなる」
「受け入れられなかった場合…貴方は……死ぬわ」
「そうですか……わかった。魔鬼さん貴方の血を私にください」
「いいの？」
「もう、後戻りはしませんから」

「わかったわ。私の血を、鬼の力を貴方に宿します」

――――静寂な森の中、それを破るかのように一つの悲鳴が響き渡った。――――

七冊目：それぞれの束の間

「…っ、痛、此処は…」
「起きましたか。具合はどうですか？」

何故、私は此処に…それに…この人は……
いゃ、この人を知っている…確か、魔鬼、さん…だっけ、それと私は…あぁ、そうか、血を、飲んで…気を失ったんだ。
朝徒は魔鬼の顔を見て答えた。

「えぇ、まだ頭がぼんやりしますが、大丈夫です」
「そうですか、無理しないでくださいね。人から鬼へと組織を組み換えたのですから、疲れと痛みは相当なハズです。今は夜までゆっくり休んでください」

そう言って魔鬼は水で濡らした布を朝徒にのせた。
それでようやく朝徒は今、自分がどのような状態か解った。
気付いた朝徒は慌てて動こうとするが、激しい痛みに上手く動く事ができなかった。

「ぐぅ、痛」
「もう、あまり動かないでください！無理をすると危険ですよ！まだ鬼の力が馴染んでないのですから。それに…」
魔鬼は少し顔を赤らめて躊躇いがちに言った。
「…あまり動かれると、その、くすぐったいです」
「す、すみません」

そう、いま朝徒は魔鬼に膝枕をしてもらっている状態なのだ。
静寂の中、滝の音だけが聞こえてくる。
朝徒は疲労感もあってかウトウトとしはじめる。瞼はかなり重い、次第に朝徒の瞼は落ちていった。

―――きらめく夕陽、その光を海が反射させ幻想の様に光り輝く。
―――

「遅かったね。来ないかと思った」
「ごめんね。なかなか脱け出せなくて」
「ふふっ、でも来てくれてよかったよ。幽」
「今日はどんな話しをしよっか？猫さん」
「そうだね、私達がどう神様と暮らしてたか話そうか」
「猫さんはその神様の事が好きだったんだよね？」
「えぇ、とても好きだった。この毛並みの色も神様が桃白くしてくれたの。私は今も好きだよ、魂はずっと一緒、今もここに居る」
「きゃー、猫さん純愛だね。素敵！私も朝徒とそんな風に愛し合えたらいいのになぁ」

少女がっかりした様に肩を落とした。
猫は苦笑しながら話しを続けた。

「私のは一方的な愛だよ。神様は誰にでも優しく、誰をも愛してたからね」
「ねぇ、猫さんはどうして神様が好きになったの？」
「神様を好きになった理由は…って、どう暮らしてたかの話しじゃなかった？」
「そうでした？まぁ良いじゃないですか。恋話し」
「幽がそれでいいなら…いぃけど」

少女は楽しそうに猫に話しかける。
猫もまた少女と幸せそうに話す。
その光景はおとぎ話のように……

八冊目：会話（前書き）

おひさしぶりです皆様（＜＿＞）
何とか生きてます！（マテ
久々の更新ですよ（本当に
いや、ホント超スローペースで
すみませんｍ（＿＿）ｍ

八冊目：会話

日は沈み、歪な月が朝徒を照らし出していた。
あれから痛みと疲れはとれ、今は普段通りに動ける調子だ。
なんでも一度慣れると回復は早いらしい。

「余り変わった感じがしないな…本当に鬼になれたのでしょうか？」
外見に変化はない、力がみなぎって来る…訳でもなく今までと変わらない感じだ。

「大丈夫です。きちんと鬼になりましたよ。正確には人間半分、鬼半分って感じです」
「そう…なんですか？イメージと全然違うので…角とか生えるかと思ってました」

魔鬼はきょとんとした顔で答えた。

「角ならもう生えてますよ？」
「えっ？何処にですか？見た感じ無いのですが…？」

朝徒はもう一度自分の身体を確認する。
が、別段変わった所はやはり無い。

「右手の肘、手首から肘の部分に収まっていますね。場所は個々変わりますが、鬼の角は殺気や闘気に反応して出現します…」

ふと、魔鬼は森の奥を見つめた。
朝徒も目を凝らして森の暗闇を見つめる。

「話しはここまでにしましょう。どうやら黒が戻って来たみたいです」
数秒すると暗闇から黒き犬が姿を見せた。
「連れてきた。それでは今後の行動について語ろうか」
こうして森の中で密会は再開された。

＊　＊　＊

――――これはある屋敷の会話……猫と少女の会話――――

「月が満ちる夜に私達は行動を起こすよ」
「満月の夜？明後日にするの？」
「うん、明後日に私達は人を殺す」
「そっか、じゃあ猫さんと話せるのはあと少しだけなんだ」
少女は寂しそうに笑って猫を抱きあげた。
猫はうつ向きながら言った。
「幽…、この街から出て、そしたら幽は助かる。私は幽に死んで欲しくないんだ…私が言えた立場じゃないけど…」
自分が言えた立場じゃない。これからする事は人を殺すこと。
神様が私達、私だけを見てくれる様に起こした行動。
けど、私は幽を好きになってしまった。
贄である人を狩る立場でありながら人である幽を失いたくないとゆ

う矛盾……
その罪悪感から猫は幽を見れないでいた。

「幽…私は…」
「ごめんね、猫さん。それは出来ないよ。猫さんが神様を愛した様に、ここには私が愛してる人が居るから…朝徒をおいて逃げる事は出来ないの」
「朝徒…その朝徒と言う人と一緒なら……」
「どうだろう、朝徒は目の前で苦しんでる人をほっとけない性格だから」
「…幽、そろそろ行くよ。今日は楽しかった」
「私もだよ猫さん」
「…一つ約束して幽。もし、明後日――――――のなら、私と――して欲しい」
「猫さん…うん、いいよ」
「ありがとう…幽」

――――そうして少女と猫の会話は終わった。
空には歪な満月が浮かんでいた――――

九冊目：森の中の密会2

「連れてきた。それでは今後の行動について語ろうか」

黒は開口一番にそう言った。

が、黒以外には猫の姿が見当たらない。

「連れて来た？姿が見えないんだけど？」

朝徒は軽く周りを見渡すが猫の姿など一つもない。

黒は自分の影を小突いて呼びかける様に答えた。

「起きろ、姿を見せてやれ」

すると黒の影がモゾモゾと動いた途端、無数の黒い玉がふよふよと出て来た。

黒い玉は次第に集まり猫の形になった。

否、それは猫の形をした立体の影だった。

「はじめまして人間、私は神を喰らいし猫の一匹…こんな姿でも元は黒猫だから。まぁ、どうでもいいんだけど」

「えっと、はじめまして朝徒です。よ、よろしく」

黒猫は朝徒を見つめた。（とは言え影なので目は無いが）

「ふ～ん、この人間が兄様と一つになるんだ…大丈夫なのコイツで？」

黒猫は興味をなくした様に朝徒から顔を背け黒を見た。

「問題ない、それよりも猫側の状況はどうなってる？」
黒猫は興味なさげに答えた。
「私達はこの土地から人を消すためにまず、人を一人残らず惨殺する事にした」
「惨殺…けどどうやって」
惨殺と言う言葉に朝徒は狼狽する。
焦る朝徒を一度見て黒猫は話しを続けた。
「方法に蠱髑（こどく）を使う。蠱髑の準備はもうほとんど完成してるよ兄様」
「そうか、なら我々も急がなくてはな」
「蠱髑って？…って、それより兄様！？黒が！？」
朝徒は黒と黒猫を交互に見た。
正直、今までの中で一番のびっくりだ。
「兄って黒は犬だし…アレは猫だろ？あれ？」
「ナニよ人間！私と兄様が兄妹じゃ変だと言いたげ？」
「イヤ、だって、えっ？」
黒猫はため息をついて黒に聞く。
「ハァ、マジでコイツで大丈夫なの兄様？」
「うむ、どうだろうな」
「駄目かも知れませんねぇ」
「っ、魔鬼さんまで！」

そんなやりとりを交えつつ、森の中の密会はまだまだ続くのだった。

十冊目：今日の出来事（前書き）

長らくお待たせしました！
鈍筆、不定期は毎度のことだから許して♪（マテ

覚えている方が居るかわかりませんがアンケートを取りますので読者の方は協力よろ（・∀・＊）
後書きに載せますのでみてくだしゃい☆

十冊目：今日の出来事

闇に沈んだ夜。
朝徒は自分の部屋に戻っていた。
今日一日で色々な事があった。今でも夢を見ている様な感じだ。

「…本当に色々あったな」

朝徒は布団に寝転んで今日の事を思い返してみた。

- - - - - -

黒達に教えられた現状。
神様が猫達に殺されていたこと
猫達が神様の力を手に入れたこと
人間に復讐しようとしていること

「猫達はそこまで人を憎んでいるのか…」

次に魔鬼さんが言ったこと。
私に黒の魂を宿すこと
黒が体を奪う可能性があること
私を中心に事を起こし、猫達を封神または滅すること
そして、魔鬼さんからは血をいただいた…鬼の血を――――

「人じゃ無くなったんだな私は……そして明日には…」

黒達との別れぎわの会話を思い出してみる。

「朝徒、明日に我の魂を貴様の身体移す…良いな？」
「あぁ、覚悟はもう決めた」

黒の言葉に朝徒は深く頷いた。

「では魔鬼、明日ここで儀式を行なう。猫達に邪魔されぬ様に結界を張りたい…出来るか？」
「短時間ならなんとか隠蔽できるわ」
「よい、儀式と同時に結界を張る」
「わかった」
「よし、明日ここで儀式を行なう。時間は早朝巳の刻だ、くれぐれも猫達に悟られぬように」
「あ、あぁ」
「わかりました」
「了解、兄様」

明日には更に人では無くなるな私は……

猫達の目的…
おそらく此処から人を消すこと

黒の目的…
人を消すことを良く思ってない猫達のたのみを聞くこと…だけではないと思う。
他に何か思惑がありそうだ

魔鬼さんの目的…
魔鬼さんが黒を手伝ってるのは何故だろう
猫達とはまったく関係が無い…
やはり黒と何かあるのだろうか？

昔からの知り合いみたいだし、それに……
朝徒はそこで考えるのを止めて窓を見上げた。

「へぇ、人の割にはなかなかの反応だね」

朝徒はただ思考を止めた訳ではない。
いつの間にか窓には一匹の猫が居た――――

十冊目：今日の出来事（後書き）

アンケートとります。

書き始めに書いたとおりこの猫遊は土台作りで語ってる物語です。
つまり本編（猫乙遊）はまだ綴られていません。
で、皆さんに聞きます。
本編の猫乙遊とこの前篇とも呼べる猫遊を同時更新するか、
猫遊が終わってから更新するか　です。
それともまったく別の話を更新するか、
灰界だけでいいんじゃね？か、
皆様のお声をお聞かせください＞＜；

解りやすく書きます。
1、猫遊を更新しつつ猫乙遊も更新する
2、猫遊が終わってから猫乙遊を更新する
3、新しい物語を更新する
4、灰界優先で更新する

です。
感想かＢｌｏｇの方にカキコんでくれたら嬉しいです♪
超長文で失礼しましたｍ（__）ｍ

十一冊目：朝徒と桃白猫

歪な月が浮かぶ夜。
朝徒が見上げた窓には一匹の桃白い猫がいた。

「へぇ、人の割にはなかなかの反応だね」
「いつの間に…」

黒達との関係がバレたか……
朝徒は警戒しつつ猫の言葉を待った。

「貴方が朝徒だよね？」
「そうですが…私に何の用ですか？」
「単刀直入に言うよ。幽を連れて此処から去るといい」
「…幽を連れて？何故です？」
「明日、ここの人全てをこの土地から消す。猫達の手で、神の力を使ってね。それに幽を巻き込みたくないの…だからいますぐにでも幽を連れて逃げて欲しい」
「……」

何か意図があるのではと朝徒は猫の瞳を見つめた。
紫がかった桃色の瞳…まるで奥に引き込まれそうな…
そんな事を考えていると、先に猫の方が口を開いた。

「決められない？なら、もっと簡潔に聞くよ…貴方はここの人間と幽どちらが大切なの？」
「っ、そんなこと」
「選べない？此処に居れば死ぬだけなのに？」
「私には此処の人達に恩がある…だから見捨てることは出来ない」

「……」

静まりかえった沈黙。

猫はうつ向き、朝徒は猫の言葉を待った。

「貴方にとって幽は一番の大切な人ではないの？少なくとも幽は…」

「幽様は確かに大切な人です。誰よりも何よりも」

「だったら！」

「だからこそ村の人達を見捨てる訳にはいかない。幽様が愛してる人達を守らなくてはならない」

猫は口をキツく閉じ朝徒を睨んだ。

一気に温度が下がる様な空気に朝徒は身構えた。

「貴方がもし幽を連れ出してくれたのなら…貴方が影でやってる事に目を閉じるつもりだったけど…此処に残るのなら私は貴方を許さない！憶えておくといい貴方を殺すのはこの私だとゆうことを！」

猫が去り静まりかえった部屋で朝徒は既に猶予が無いことを悟った。

「明日、猫達も動くのか……」

先ほどの会話で得たものは多い…けれど先ほどの猫は…

「幽様と知り合いなのか？それに私達が動いてたことを知っていた…」

猫達にこっちの行動が筒抜けなのかも知れない。

「取りあえず今は明日のことだけを考えよう」

幽様とさっきの猫はどんな繋がりがあるのだろうか……

――全ては明日、猫と人の運命の歯車が急速に廻りだす――

十二冊目：赤き夢

赤、紅、緋…
真っ赤に彩られた世界。
木々は焼け、家は燃え、周りを赤くてらつかせていた。
下を見れば赤い液体が広がっている。
周りを見れば真っ赤に染まったモノが幾つも転がっている。
先ほどまで動いてたモノ…人、猫、死体。
どれも真っ赤に染まり赤い液体を滴らせている。
自分を見れば腕、足、体、どれも真っ赤に染まっていた。
手に持つ刀も赤く彩られている。
前を見た……其所に見えるのは最愛の人。
ただ、その瞳は私の知っている瞳ではなく…紫がかった桃色の瞳だった。
彼女は私を見ると、さも可笑しそうにケラケラと笑う。
私はただソレを睨む様に見ていた。
一通り笑うと彼女は私に問いかけた。

「お互い人じゃなくなったね？」

私は答える。

「えぇ、そうですね」

彼女は訊く。

「ねぇ、朝徒は今楽しい？」
「…」
「私はとても楽しいよ。今も感情を抑えるのが辛いほど、ふふふ」

「…」

「アハハ、もうそろそろ限界かな…最後に聞くね。コレが朝徒の見る現実？」

私は最後の問いにはっきりと答えた。

「いいえ、夢です」

……

……

…

朝日が昇る前に朝徒は眼を覚ました。

体が汗ばんでいる…なんだか嫌な汗だ。

「…とても嫌な夢を見ていたような……」

朝徒は窓を開けて外の空気を吸い込んだ。

「今夜が満月…長い一日になりそうだ」

朝徒は支度をし、黒達の待つ森へと向かった。

———今宵、満月の下で猫と人の宴が始まる———

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7053d/

猫達の遊戯

2010年12月31日08時21分発行